



聖書論



第一章 聖書

1.1. 自然の光 (light of nature) と創造と摂理の御業が、神の善と知恵と力を確実に表わし、誰も弁明できません (ロマ 2:14-15、1:19-20、詩 19:1-3、ロマ 1:32、2:1)。しかし、そのようなものは、救いに必要な、神とその御心を知る知識を十分に見せてはくれません (I コリント 1:21、2:13-14)。従って主は、いろいろな時に、そして、いろいろな方法で、ご自身を啓示なさり (ヘブル 1:1)、御自分の教会に、御自身の御心を宣言なさることを喜ばれたゆえ、その後には、真理を一層良く保存し広げるために、そして、教会を肉の腐敗とサタンと世の悪とに対して備えさせ、教会をさらに固く立たせ、慰めるために、すなわち、その真理を綿密に記して置くことを喜ばれました (箴 22:19-21、ルカ 1:3-4、ロマ 15:4、マタイ 4:4, 7, 10、イザヤ 8:19-20)。これは、聖書が何より必要とされる理由です (II テモテ 3:15、II ペテロ 1:19)。神は御自分の民に、ご自身の御心を直接啓示された過去の方式は、今は中断されています (ヘブル 1:1-2)。

宗教改革者たちは、信仰の条項等に対して、告白書と教理問答書等を作成しました。ルター (Martin Luther, 1483-1546) の場合、大一小教理問答書を作成し、フィリップ・メランヒトン (Philp Melancton, 1497-1560) は、神学大全を出版しました。カルヴァンは (John Calvin, 1509-1564) は、キリスト教綱要の 5 回に渡る改訂作業を通して、1559 年に 4 巻になる最終版を出版しました。このように宗教改革者たちは、信仰の条項を叙述する時、一般的に神論から説明しました。ただ、ハインリヒ・ブリンガー (Heinrich Bullinger) が 1566 年に作成した「第二スイス信仰告白書 (The Second Helvetic Confession) 」だけは、聖書から始めます。その理由は、教理と信仰の条項は聖書から持って来たこと、哲学的な根拠から持って来なかったことを確かにするためでした。

信仰と信仰の規則と救いのすべての真理の根拠が、聖書にあることを語るためでした。ウェストミンスター信仰告白書のこのような始まりは、総会員たちに神学的に影響を与えたウィリアム・ウィテカー (William Whitaker, 1548-1595) の「聖書に関する論争 (Disputations on Holy Scripture)」と、⁸² ジェームズ・アッシャー (James Usher, 1581-1656) の 1615 年の「アイルランド信仰告白書 (Irish of Religion)」からでした。⁸³ 総会員たちの中でエドワード・レイ (Edward Leigh, 1600 - 1671) の影響力も無視することはできませんが、その組織神学の書であった「A System or Body of Divinity (神学の体系) 」は、聖書論から始まっています。

82 ウィテカーは、ケンブリッジ大学で神学教授という時、ローマカトリック教会との神学論争に参加しました。彼はローマカトリックの神学者であったベラルミン (Bellarmine) と論争しますが、最優先となる論争の主題は聖書でした。彼の作品「聖書に関する論争」は、1610年のラテン語で書かれた作品として改革神学の立場での卓越な聖書論であって、傑作でした。勿論、清教徒たちに広く知れ渡ったものでありウェストミンスター総会員たちに影響を与えました。

83 アッシャーは 1648 年に「Sum and Substance of the Christian Religion」を出版しますが、それは、アイルランド信仰告白書より、はるかに多い分量の作品であり、組織神学と同じ書ですが、この作品でも聖書論から出発しました。

ウェストミンスター信仰告白書 1 章 1 項では、自然の光と創造と摂理の働きを通して、神の存在と、完全な属性を意識することができるかと語っています。神は部分的にご自身を、自然の光によって人間の良心に示され、人間は神のかたちに創造されたので、神的属性が反映されるからです。従って、たとえ人間が墮落したとしても、神のかたちが残っているので、神を創造主・神として認めざるを得ず、すべての万物を捕らえておられる神を否定することはできません。結局、自然の光は、すべての人に神の善と知恵と力とを見せておられるので、これは最小限、新しく生まれていない者たちを導き、彼らに道徳的な生活をするようにさせます (10 章 4 項 参照)。

しかし、1 章 1 項は、自然啓示だけでは限界があると語っています。自然啓示が神を知る知識と、神の御心を知るには十分でないことを語り、救いを得ようとするならば、神と、その御心を知る知識が必要ですが、自然の光では、そのような知識を得るのが難しいと言及しています。従って必ず、神が直接語られた、特別啓示の必要性を説明しています。しかも、聖書の目的は神を啓示することです。神は御自身を自ら表わし、救いに関連して、御自身の御心を教会に現わすことを喜ばれましたが、それが、聖書にあると明らかにしています。つまり、神御自身の御心である、救いの方法を知らせるために、私たちに聖書をくださったのです。1 項のこのような言及はジェームズ・アッシャー (James Ussher, 1581-1656) のアイルランド信仰告白書 (Irish articles of Religion, 1615) でも示されていますが、私たちの信仰と信仰の規則と、すべての救いの真理の確実な根拠は、聖書にある、神の御言葉だと語りました。

1 章 1 項のこのような叙述には、その当時の教会の中にあつた誤り等々に対する論駁も含まれています。先ず、自然神論主義者を論駁しています。自然神論 (Natural Theology) は、清教徒当時にハーバート (Herbert of Cherbury, 1683-

1648) が主張したものです。自然神論主義者たちは、神の存在なさることは信じますが、聖書の神的権威と超自然的な贖いの御業を信じなかったのです。彼らは、理性的合理主義者として超自然的な啓示は拒否し、神と道徳的義務を自然の光だけで探そうと努力したのです。しかし、このような知識だけでは、神に対する真の知識は得られません。

一方で、清教徒時代に、ファウストゥス・ソシネス (Faustus Socines, 1539-1604) は、キリストの神性を否定し、理性が、啓示より先立つと主張しました。ソツィーニ主義者たちは、自然の法と光に従って生きれば救われると主張したのですが、それはキリストを贖い主として信じなかったからです。従って、ウェストミンスター信仰告白書は、神が教会に、御自身の御心を示す特別な啓示を許可なさったので、教会は真理をより一層保たせる責任があり、真理が保たれる限り、教会は堅固に立つと語っています。

勿論、ウェストミンスター信仰告白書の1章1項の言及の中には、ローマカトリック教会の誤りを念頭において論駁する部分があります。ローマカトリック教会は、人間の伝承を聖書と同じ権威に置いています。ローマカトリック教会は、自分たちが真の教会であって教会自体は誤りがないので、聖書がなくても信仰に対する条項等を頒布させ、教えることができると主張します、実際に、ローマカトリック教会は、聖書にない教理と聖書に反する内容等を恐れもなく作り出して、教えています。ウェストミンスター信仰告白書は、ローマカトリック教会の誤り等は、肉の腐敗とサタンの策略から来ていることだと、はばからず語っています。

ウェストミンスター信仰告白書1章1項で、総会員たちが明示しようとした誤りの中で一つは、再洗礼派運動でした。再洗礼派は、新しい啓示を主張しま

した。そして、清教徒時代に起こされたクエーカー主義は、ジョージ・フォックス (George Fox, 1624-1691) が英国で起こした間違っただけの靈性運動でしたが、「内なる光 (inner light)」という教理を強調しました。クエーカーという意味は「神の言葉の前で震える」ということですが、彼らは物理的に、体に現れる現象に中心を置きました。内的な声と幻の現象が、聖霊の御業だと言うのでした。クエーカー主義者たちは、今も啓示が継続されると主張しました。それゆえ、ウェストミンスター信仰告白書は、過去には預言者たちを通して啓示され、新約時代に至っては、独り子を通して、御自身の御心を完全に啓示なさったので、今は、この世が終わるまで、新しい啓示はそれ以上ないことを明らかにしています。神が聖書を完成させた以降、夢や幻や預言者たちに、御自身を啓示なさらないことを明示しています。

ウェストミンスター信仰告白書 1 章 1 項の叙述は、この時代の誤りに対しても論駁しています。現代福音主義者の中には、しるしと不思議を手段や道具として伝道する者たちがいます。彼らは聖書を無視し、心理学、社会学、文化人類学を用い、伝道方法を作り出しています。彼らは、神の御言葉が講論 (救いの教理が説教) される中で、聖霊の御業によって「救いの聞き (saving hearing)」が起きるように、神が、救いの手段と定めておられるのに、それを無視して、他の方式で伝道するのは、結局、神の御言葉が無視することです。

20 世紀後半から現在に至るまで、流行っている「新使徒運動」も、やはり、ウェストミンスター信仰告白書が念頭においている誤りに該当されます。新使徒運動は、預言をその中心とし、聖書にある内容より、表れてる物理的な現象に片寄って、聖書の中にある救いの啓示に反することを教えています。彼らの問題点は、自分たちが受けたとする啓示と、賜物の権威を主張するために、新しい使徒たちだと自分たちを包装することにあります。これは、清教徒時代にあったクエーカー主義者と同じ誤りです。

1.2. 聖書、つまり、記された神の御言葉には、今、旧約と新約にある、次のような書が、すべて含まれます。

旧約：創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、ヨシュア記、士師記、ルツ記、Iサムエル記、IIサムエル記、I列王記、II列王記、I歴代記、II歴代記、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記、ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌、イザヤ書、エレミヤ書、エレミヤ哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書。

新約：マタイの福音書、マルコの福音書、ルカの福音書、ヨハネの福音書、使徒の働き、ローマ書、Iコリント書、IIコリント書、ガラテヤ書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、Iテサロニケ書、IIテサロニケ書、Iテモテ書、IIテモテ書、テトス書、ピレモン書、ヘブル書、ヤコブ書、Iペテロ書、IIペテロ書、Iヨハネ書、IIヨハネ書、IIIヨハネ書、ユダ書、ヨハネの黙示録。

これらのすべての書は、信仰と生活の規準となるように神の靈感によって与えられました（ルカ 16:29, 31、エペソ 2:20、IIテモテ 3:16、黙 22:18-19）。

1.3. 一般的に「外典」と呼ばれる書は、神的靈感によるものではなく、聖書の正典の一部でもなく、従って、神の教会の中で何の権威もなく、また、他の人の著作物と違ったどのような仕方でも是認されたり、使用されてはなりません（ルカ 24:27, 44、ロマ 3:2、IIペテロ 1:21）。

ウェストミンスター信仰告白書が、聖書 66 巻を明らかにしているのは、ローマカトリックと聖書に関する論争をしたウィテカー (Whittaker) から影響を受けたことと、ジェームス・アッシャーのアイルランド信仰告白書 (1615 年) に従ったことです。ただ聖書 66 巻だけが「聖霊の感動によって記録された」こ

とを明らかにしているのは、ローマカトリック教会が外典を正典の一部として受け入れたこと、英国国教会の39個条（1563年）において、外典をキリスト者の模範的生活のために特別に有用だと言っていることは、間違っていると明示し、外典は聖霊の靈感によるものでないので聖書の一部になることはできず、教会で、どのような権威も持つことはできないことを確かにしました。

清教徒時代、当時、聖書に関する誤りとして、クエーカー主義者を挙げることができます。彼らは、聖書を神の御言葉と呼びません。聖霊の声が信仰と生活の規準になると主張します。また、聖書に関する誤りとして、20世紀自由主義神学を挙げることができます。20世紀自由主義神学は、ストア哲学に影響を受けて、キリスト教は教理問題ではなく生活だと言ったのです。キリスト教と倫理を同一視しています。しかし、キリスト教は教理問題です。正しい教理から生活が出るようになります。つまり、聖書は、信じるべきことについて教え、義務について教えているから、信仰と生活の規準となるのです。すなわち、信じることについての内容が、義務より先立つのは、正しい教理によって正しい信仰生活が出て来るからです。

一方、20世紀に流行り、今日までも優勢な神学の一つである、現代福音主義者たちは、聖書の絶対的権威を認めません。20世紀、新福音主義として始めた時、カール・ヘンリー、ヘロルド・オクケンガは、聖書解釈のために科学的発見と、知識が重要だと強調しました。彼らは、聖書の代わりに社会学、文化人類学、心理学を牧会の働きと宣教の道具としたのです。このような方式で立てられたのが、ドナルド・マクガブラン（Donald McGavran, 1897-1990）の、同質性単位理論（Homegeneous Unit Principle）と、教会成長学です。

1.4. 必ず信じなければならない、従順のための聖書の權威は、ある人や、教会の証言にも依拠せず、聖書の著者であり、真理そのものである神に、全く依拠します。従って、聖書の權威は、神の御言葉であるという理由から、受け入れなければなりません。（Ⅱペテロ 1:19-21、Ⅱテモテ 3:16、Ⅰヨハネ 5:9、Ⅰテサロニケ 2:13）。

1.5. 私たちは、教会の証言によって感動と勧告を受け、聖書を高く評価し尊敬するようになります（Ⅰテモテ 3:15）。また内容の天的性質、教理の有効性、文体の尊厳、あらゆる部分の一致、全体の範囲が、神にすべての栄光を帰そうとする目的、人間が救われる唯一の方法について、完全に明らかにし、比較することのできない多くのたぐいぬ優秀性や、その全体の完全さも、聖書が神の御言葉だということを、十分立証させてくれる論拠です。しかし、聖書の無謬な真理と、神的權威に関して私たちが完全な納得と確信できるのは、私たちの心の中で御言葉と、そして御言葉と共に証言してくださる、聖霊の内的な御業から出るものです（Ⅰヨハネ 2:20, 27、ヨハネ 16:13-14、Ⅰコリント 2:10-12、イザヤ 59:21）。

ウェストミンスター信仰告白書には、聖書が神の言葉であることを聖書が自ら証しすると記されています。神の言葉の神的權威と誤りのない真理だという確信は、実際に聖霊の内的な照明の御業から来ます。聖霊さまが神の御言葉を持ち、私たちの心の中で証します。聖書と聖霊との関係にあつては、大分前に預言者イザヤが語ったことです（イザヤ 59:21）。使徒ヨハネは、それについて、聖霊の注ぎの油と語りました。聖霊の注ぎとは真理に対する知識を得ることです。それで、真理と真理でないものについて分別することができるのです（Ⅰヨハネ 2:20, 27）。

さらに、聖書に対する權威を認めるべきは、神が直接に語ったからです（ヨハネ 1:14, 14:6）。私たちが聖書を信頼することは、神の言葉だからです。ウィテカーによると、聖書が神の言葉だという証拠は、外的には聖書の著者たちの人

格、奇跡等々、預言等々の成就、長い年月に渡って完全に保全されて来たこと、聖書が起こした驚く効果、聖書を無くそうとする努力の失敗、殉教者の証拠と民族等を文明化させ、社会改革を成就させたこと等であり、内的な証拠は、聖書に記された教理の卓越さと属性、神の統治と御業を現す内容、人間の状態と欠陥を正確に扱っている真理、文体の壮厳さ、神の栄光と人間の救いを志向させる性向等だと語りました。

ウェストミンスター信仰告白書のどの条項においても、常に強調されることがありますが、それは、聖霊の有効な御業 (effectual works of Holy Spirit) です。1章5項でも、これについて言及していますが、聖霊によって救いの信仰が発生されたのなら、聖書を神の言葉として高め、賛美するようになると語っています。

ウェストミンスター信仰告白書1章4、5項で念頭に置いている誤り等々があります。まず、理性主義者たちは聖書の権威を受け入れないのですが、それは誤りです。また、ペラギウス主義者たちは、霊魂の機能を持ち、神に関することを理解することができ、信じることもできると主張します。つまり、聖霊の内的照明と感動がなくても可能だと主張します。これは、聖書と聖霊が結ばれていることに反対する誤りです。また、ローマカトリック教会は、聖書の権威が教会の証言にかかっているのだと主張することで、教会を、聖書の権威より上に置いています。それゆえ、神の言葉に支配を受ける教会ではなく、神の言葉を支配する教会になりました。これは明白な誤りです。そして、ソツィニーニ主義者たちも、この誤りに含まれますが、聖霊の内的な照明なしに、理性によって神に関連することが理解でき、信じることができると主張しました。

聖書の権威を受け入れないのは、20世紀にも続けられています。まず、自由主義神学が、聖書の権威を受け入れずに、聖書は神の言葉ではないと強調しま

した。様式批評のブルトマンのような神学者は、福音書に神話が入っているから、それを取り除くべきだと主張しました。カール・バルトの新正統主義も、聖書の権威を認めないのは自由主義神学と同じでした。カール・バルトは、聖書が神の言葉になる (becomes) と主張することで、聖書自体が神の言葉ではなく、人間によって主観的に、神の言葉になるのだと述べました。

聖書に対する誤りは、この時代にもやはり流行っています。現代福音主義者たちは、神の言葉を教えながら、その靈魂に聖霊が御業を行われて救いが発生することを無視します。現代福音主義者たちは、聖霊の御業を期待するのではなく、表面的なメッセージと感情を動かす方式で、決心を引き出そうとします。結局、彼らは聖書が無視していて、心理的なテクニックと方法によって、聖霊の代わりとして使用しています。聖霊の御業に対する無知のあまり、神の言葉を機械的な手段として使用したり、無視しているのです。

教会の歴史において、聖書の権威を無視し、戦いを挑んだ神学が教会を倒してしまったのです。従って、この時代の色々な神学思想が正しいのか、間違っているのかを分別する時は、聖書の権威に対する態度を調べて見なければなりません。

1. 6. 神ご自身の栄光と、人間の救い、信仰と生活のために必要なすべてに関する神の御心全体は、聖書に確かに記されていて、あるいは、善を求め、必要な結論等は、聖書から推論できます。それゆえ、聖霊の新しい啓示によっても、あるいは、人間の伝統によっても、どのような時にも、何一つ聖書に追加されることはできません (Ⅱテモテ 3:15-17、ガラテヤ 1:8-9、Ⅱテサロニケ 2:2)。しかし、御言葉に啓示されている事々について、救いの理解のためには、神の聖霊の内的照明が必要だということを認めます (ヨハネ 6:45、Ⅰコリント 2:9-12)。そして、神に捧げる礼拝と、教会の政治とに関して、人間の行動と社会と共通する状況等がありますが、自然の光と、キリスト者の慎重さによって整理されるべきであり、御言葉の一般的な原則に従いながら、これらは、常に遵守されなければなりません (Ⅰコリント 11:13-14、Ⅰコリント 14:26, 40)。

1.7. 聖書にあるすべての事柄は、それ自体で、一様に単純なことではなく、すべての人に一様に明白なものでもありません（Ⅱペテロ 3:16）。しかし、救いのために必須的に知らされていることと、信じて守るべきことは、聖書のどこかの箇所でもとても明確に提出されていて、開陳されているので、学識のある人だけでなく、無学な人でも、通常の方法を適度に用いるならば、それらを十分に理解することができます（詩 119:105, 130）

ウェストミンスター信仰告白書は、聖書の十分性について説明しています。聖書の十分性とは、人は神に対して信じなければならないことと、神が人間に要求なさることを教えるだけでなく、神ご自身の栄光と人間の救い、信仰と生活に必要なすべてについて記しているからです。信仰という問題に関連してすべてが適用できるというのは、私たちの救いに関連する問題を意味します。従って、救いの道を見出すためには聖書以外、他の所に行ってはなりません。結局、キリスト教のすべての教理等は、ただ聖書でだけ推論し出さなければなりません。教理と信仰の原理だけではなく、礼拝においても聖書で十分です。

しかし、ウェストミンスター信仰告白書を作成した当時、ローマカトリック教会は聖書で十分ではなく、記されていない人々の伝承が必要だと主張しました。また、再洗礼派、アルミニウス主義者、クエーカー主義者たちは、聖書が信仰問題を説明しているが、聖書だけで信仰問題に対する答えを探してならないと主張しました。最も、再洗礼派とクエーカー主義者たちは、新しい啓示を主張するから、間違いなく誤りです。ウェストミンスター信仰告白書 1 章 6 項 7 項での言及は、聖書の十分性を否定する主張が誤りだと語っているのです。

このような誤り等々は、17 世紀の誤りで終わることなく、20、21 世紀の福音主義教会内でも簡単に確認することができます。宣教と教会成長のためには、聖書のメッセージではなく、社会学と心理学が道具となるべきだと主張して、

伝道においても聖書のメッセージではだめで、文化を通してすべきであると述べます。最も礼拝が、聖書のメッセージで構成されるのではなく、ドラマのような方式を探すべきだと言うのです。

聖書の十分性に対する誤りと異端たちは、人間の理解力が、墮落と腐敗によって暗くなり曲げられているので、必ず、聖霊の内的照明の御業が必要だというのを否定するところから来ます。ソツツィーニ主義者とアルミニウス主義者たちが、聖霊の内的照明の御業の必要性を否定するから、聖書の十分性を信じないのです。それで、ローマカトリック教会が御言葉の代わりに儀式中心になるように、現代福音主義教会が聖書のメッセージより視覚中心になっているのです。これは、礼拝を墮落させ、腐敗させています。

ウェストミンスター信仰告白書は、聖書の十分性と完全性を語ることで、新しい啓示が追加されてはならないと強調しました。私たちは、聖霊の新しい啓示を必要としません。しかし、今日の新使徒運動は、奇跡的な声と新しい啓示を通して多くの人々をキリストを信じるようにできると主張しますが、誤りです。

従って、私たちの責任は、神の御言葉を正しく使用することです。聖書を注意深く読み、祈る心で聞き、聖霊の祝福なさを期待すべきです。主が人々に救いの恵みを経験できるように定めた方法は、神の御言葉を聞くことと、勉強することです。従って、真の救いの恵みがあるように望むなら、御言葉を聞ける手段の下に出て来なければなりません。

1.8. ヘブル語で記された旧約聖書（ヘブル語は昔の神の民が使用した言語でした）と、ギリシャ語に記された新約聖書（ギリシャ語は新約聖書が記された当時、最も一般的にすべての民族に知らされていた言語でした）は、神によって直接靈感されていて、また、神の特別な保護と摂理によって、あらゆる世代に純粹に保たれたので權威があります（マタイ 5:18）。従って、どのような信仰論争があっても、最終的には聖書に訴えなければなりません（イザヤ 8:20、使徒 15:15、ヨハネ 5:39, 46）。神のすべての民は、聖書に対する権利と関心を持っています。神を敬う心によって聖書を読み、研究するように命令を受けていますが（ヨハネ 5:39）、聖書の言語をすべての人が知っているわけではありません。従って、聖書は、聖書が伝受された各国の自国語で翻訳されるべきです（Iコリント 14:6, 9, 11-12, 24, 27-28）。それでこそ、神の言葉がすべての人に豊かに届けられ、彼らが神を正しい方法で礼拝できるようになり（コロサイ 3:16）、聖書が与える忍耐と慰めによって望みを持つようにしてあげるべきです（ロマ 15:4）。

ウェストミンスター信仰告白書は、前でも聖書の完全性、十分性をすでに説明しました。1章8項では、聖書の最終性を強調しました。信仰と関連される、あらゆる論争においては、最終的に聖書に訴えるべきであるとしています。

それゆえ信仰告白書は、聖書がヘブル語とギリシャ語によって記されたのなら、神の非常な保護と摂理によって純粹に保たれたことと語っています。一方聖書は、各国の言葉によって翻訳されるように、神によって命じられていることを語りました（申 31:11-12）。この部分の叙述での総会員たちは、ウィテカーの影響を受けました。彼は聖書が、サタンに敵対する重要な武器だから、民から聖書を奪ってはならない、聖書は公的に読まれて民に有益を得るようにし、主の教会は、必ず救いの奥義について教えを受けなければならない、キリストも彼らの言語によって教え、使徒たちも五旬節にそのようにしたことを記して

います。一方、信仰告白書がこのように叙述した背景には、ローマカトリック教会がラテン語の聖書である (Vulgate) 聖書だけを認めて、他の翻訳を否定していて、その誤りを指摘しているのです。聖書の究極的な目的は、神を知る知識があるようにさせ、神を正しく礼拝させ、神の民に慰めを与えるようにするためだとしました。ウェストミンスター礼拝指針でも、聖書は公的に読まれて人々に有益を与えるべきだとしました。

1.9. 聖書解釈の無謬の規準は、聖書自体です。従って、どの聖句でも、真の完全な意味について疑問が生じる時は（真で、完全な意味はいくつもあるのではなく、ただ一つです）、より明らかに語っている、他の聖句を研究しながら、知るようになれば良いです（Ⅱペテロ 1:20–21、使徒 15:15–16）

聖書解釈の無謬な規準は、聖書自体です。聖書自体を持ち、聖書を解釈し理解することです。この原理は、聖書のすべての書の著者が神だからです。それゆえ、宗教改革者たちも、この原理を強調しながら、聖書を出版する時に関連される聖句等を聖書本文の余白に載せたりもしたのです。⁸⁴ ゼネバ聖書の 1599 年版が、その代表的な例です。また、ウェストミンスター信仰告白書を、初めて作成した時には関連聖句はありませんでした。それで議会は、信仰告白書と関連する聖書箇所を追加して載せることを指示したりもしました。ウェストミンスター信仰告白書は、聖書どの聖句でも真の完全な意味はただ一つであることを強調しました。それは、真理は一致性を持っていて、互いに違う二つの意味を持っていないことを意味します。ウェストミンスター信仰告白書は、あいまいな聖句に関する解釈の原理についても言及していますが、確かな聖書聖句か

84 聖書本文を研究する時、引照・注付聖書を使用するのが助けられます。

ら、あいまいな聖句を解釈すべきであると述べました。結局、聖書 66 巻の書を読む時、私たちは一つの書として読むべきです。

一方、聖句の説明において、ウェストミンスター信仰告白書が排斥する誤りは、ローマカトリック教会の聖書解釈方法です。ローマカトリック教会は、聖書自身が解釈者となることを反対します。彼らは、聖書を理解するためには、教会が必要だと主張します。ローマ教会の重要な洞察力が、聖書を理解するのに必須的だとしながら、中世教会からすべての聖書本文は四重的意味を持っていると主張しました。第一に本来の意味があって、第二にアレゴリー (allegory) と呼ばれる比喩的意味、第三に道徳的意味、第四に天上の意味として解釈すべきだと述べるのです。それは聖書から意味を引き出すのではなく、聖書の解釈を読ませることなので正しい解釈方式ではありません。一方でクエーカー主義者は、本性の光が聖書解釈の原理になると主張します。これは深刻な誤りです。

1. 10. 信仰に対するすべての論争を終結しながら、教会会議のすべて信条と、古代教父たちの意見と、人々の教義と、偽りの霊を試しながら、私たちの安住を宣言なさる最上の裁判官は、聖書の中で語っておられる聖霊以外に誰もいません (マタイ 22:29, 31、エペソ 2:20、使徒 28:25)。

ウェストミンスター信仰告白書は、すべての信仰論争を終結させる最上の裁判官は、聖書を通して語っておられる聖霊以外にいませんと述べています。聖書と聖霊との関係を言及しました。この言及から、教会の重要な職務の中で一つは、偽り異端と誤りの教えを分別することです。異端と誤りの分別の範囲も述べていますが、教会会議のすべての信条と教父たちの教えまでも含めています。この条項の言及は、カルヴァンのキリスト教綱要、序文の言葉が山彦のように聞こえて来ます。カルヴァンは、ローマカトリック教会が聖人と思う教父

たちも聖書から外れることがありうるとし、それは必ず試されなければならな
と主張しました。この条項で信仰告白書は、ローマカトリック教会は聖書の最
終的権威を認めず、無謬な権威が教皇と教会会議にあると主張しているから、
彼らの見解は間違っていると明確にしました。